

はじめに

本書は、今までの著作とは大きく異なる制作過程を経て生まれました。

通常は、著者が草稿を執筆し、幾度かの編集や校正を経て、本が完成します。

ベースに存在するのは、「書きたい」「伝えたい」という書き手の思いや考えです。

多くの著作は、そのような土台や過程を経て生まれてきます。

一方で本書は、インタビュアーによる「質問」を起点として、草稿が生まれました。

ベースに存在するのは、「聞きたい」「知りたい」という聞き手の思いや考えです。

「教師を志すようになった『原体験』は何ですか」

「新任時代には、どのようなトラブルを経験しましたか」

「学級通信を、なぜそれだけたくさん書くようになったのですか」

「今の時代、教師はどのように力量を形成していけばいいと思いますか」

「今後も変わらぬ教師の大切な役割があるとすれば、それは何だと思いますか」

シートノックのように次々と投げかけられる質問に、私は答え続けました。

その聞き手役を今回担ってくださったのが、編集者の北山俊臣氏と、小学校教師の福

澤美里氏です。

お二人とも、「教育」という大カテゴリーに関係する仕事をしているという共通点はあるけれども、立場は私と大きく異なります。

北山氏は、これまで数々の教育書を世に送り出してこられた気鋭の編集者。

かたや福澤氏は、豊かな感性と卓越した行動力を兼ね備えた若手の女性教師。

立場がちがえば、性別がちがひ、年齢もちがうお二人からの質問の数々は、いずれも私にとって新鮮な感動や気づきをもたらしてくれました。

そのお二人からの質問に答える中で、私はしばしば不思議な感覚を覚えました。

私の答えを聞いたお二人が、目を見開いて驚いていたり、深く唸りながら頷いていた、「この話が聞けて本当によかったです」と感謝を伝えてくれたり。

そうした豊かな反応を間近に見せてもらう過程で、自然と私の中からも「この内容を多くの人に伝えたい」という思いが沸々と生まれ、大きく広がっていったのです。

そのようにして行ったインタビューをテープ起こしたものが、本書の第一稿です。

その原稿を初めて読んだとき、私はさらなる不思議な感覚に襲われました。

間違いなく自分が話した言葉であるにも関わらず、どこか自分ではない別の誰かが紡いだ言葉が並んでいるように感じられたからです。

それはきっと、他者の「知りたい」をきっかけとして自身の「伝えたい」が醸成され

ていくという化学反応が、制作過程において生まれていただからだろうと考えています。

北山氏と福澤氏とそして私。

三者で行った和やかな鼎談の中で、色んな思いや考えが交錯し、時に重なり、時に融合しながら生まれたのが本書です。

是非、楽しく語らっている我々3人の輪の中に入っていたただくような感覚で読み進めていただければ幸いです。

そして、その中でたった一つでも貴方の「知りたい」「聞きたい」に答えられたとするなら、これほど嬉しいことはありません。

もう一人の聞き手である貴方との語り合いが本書の中で豊かに生まれることを、心より楽しみにしています。

第1章 原体験と教員としての歩み 7

- 教職を志した原体験 8
- 「自分を伸ばしてくれる」という実感 14
- 授業技術に魅せられる 19
- 新任時代の最初の大トラブル 21
- 子どもたちからもらった数々の贈り物 26
- 圧倒的に授業がうまくならない 30

第2章 汗をかく 35

- 質量転化の嘘 36
- どこで汗をかくか 42
- 汗のかき方は変化する 45
- 時代に合わせた汗のかき方 50
- 足で稼ぐ 52
- 選択をする、合わせる 56

第3章 恥をかく 59

- 本気で行動する 60
- 「恥をかく舞台」を自分でつくり上げていく 63
- 挽回のチャンスを見逃さない 66
- 期待以下か期待どおりか期待以上か 69
- 新天地で恥をかく 70

第4章 文をかく 73

- 書いて書いて書きまくる 74
- インプットとアウトプット 77
- チューニングする 81
- スタンスを変える 85

第5章 学級と授業を磨く 91

- 特別支援と学級経営 92
- その場をつくっているのは誰か 96
- スピードを磨く 98

第6章

研いで、磨き続ける

133

条件付きではない愛の存在（学級経営）—— 103

授業で自分自身への感動を体験する—— 107

幅広く学ぶのか一つを突き詰めるのか—— 111

全員達成をなぜ目指すのか—— 113

材料と腕を磨く—— 120

読書の楽しさに開眼させてくれた師匠—— 124

腕を磨くとは在り方を磨くこと—— 126

本の買い方—— 129

声と言葉を研ぐ—— 134

バランスをとる—— 137

言葉を尽くす—— 139

教師の学び方に起きた変化—— 142

今後の話—— 148

原体験を渡し続ける—— 151

スピードを磨く

教育というのは惰性の強い制度だとよく言われています。惰性が強いというのは、入力から出力までが遅いということです。政治家が当選するたびによく言うのは、まず教育にお金をかけるとか、教育に力を入れるとかを掲げるんです。なぜそれを掲げるかというと、失敗がないからなんです。いわば検証しようがないから、それを言うんです。

うがった見方ではなくて、いろいろな社会学者や教育学者の方々が言っていることを私は引用して言っているのですが、要は当選して教育改革だとか言うじゃないですか。やったとしてもその検証や結果が出てくるのは、その人が在職中になされないことの方が多いですね。10年後とか20年後とかに審判が下されたりすることがあるので。

われわれがやっている仕事も、今入力したからといってすぐ出力されるわけではなく、そういう意味でいったら、成長とかもなかなか花開くのが遅いこともあるので、まあまあしょうがないよねという議論はわかります。

わかるのですが、一方で私はスピード感をもつてすごく大事にしてきました。特に荒れているクラスをもったときほど、その荒れが深刻であればあるほど、変容にかかる時間

を短くしたい。そう思って取り組んできました。

たとえば、ある年に受けもったクラスにはじめの中心にいた子がいました。5年生のときにクラスメイトをいじめて不登校にさせて、しかも他の子たちと結託して、様々な問題行動の限りを尽くしている。その子の担任に6年生でなつたんです。ではその子が、たとえば心のコップの向きを変えて、何か前向きな行動とか人のことを思いやれるようになったりするまでに、一体どのぐらいの時間がかかると思いますか？ 講演会でこういうことを尋ねると、数カ月から半年という答えが最も多いんです。でも、私の感覚では半年も気長に待っていては荒れたクラスは立ち直っていかないと思っているんです。そこには、成長や変化におけるスピード感のようなものに一定の覚悟や決意のようなものがいります。

ですから、私は、やはり出会った刹那にでも、少しでも風向きを変えてあげたいなと思います。結論から言うと、先ほど話したいはじめの中心にいたその子は私と出会った瞬間に大きく変わったんです。もちろん、そのためには、いろいろな布石を打つたんですよ。担任発表の前からいろいろな準備を重ねて、情報を集めて、磨けるものにはあらためて磨きかけた状態で、この子がこうきたら必ずこうしてみたいなことの段取り、シミュレーションを頭の中でして…。初日の出会いの瞬間に、何か一つでもよい種をま

いて芽吹きまでもっていきたいと考えて準備を重ねました。そのうちの一つがうまくいって、初日からその子がすごくいい行動、利他の行動を積むようになっていったということがありました。

卒業文集にその子は、私と出会った初日のことを書いたんです。他の子が自分の夢とか、修学旅行とか大きなイベントのことを書く中で、その子は卒業文集に私と出会った日のことを書いたんですよ。「今変わろうと思った瞬間」というタイトルなんです。書き出しは、「ドン！ ドン！ 以前の私は荒れていた」と。そこから始まるんです。5年生のときを回想して、私はこんなことをして、あんなことをして、と反省のところから卒業文集がスタートするんです。

でも、その子自身も「変わりたい」と思っていたみたいですね。それが文章に書いてあった。私が担任発表の瞬間に、「図工室に新しい教科書を取りに行くんだけど、誰か手伝ってくれる人はいないかな」と言って、私はもう作戦を立てていたわけです。その子は力持ちなので。「誰か手伝いに来てくれないかな、先生一人では持てないんだよ、誰か力持ちの人、力を貸してくれないかな」と言って、その子に視線を多めに当てたんです。

もちろん、通常のクラスなら多くの子が手を挙げるような瞬間です。初めて会った担

任の先生の手助けをしたい!と思う子が続々と出てくるような場面なのに、そのクラスは誰も挙げていないんですよ。それはやはり学級の状況がものすごく荒れていたからです。子どもたちは目立ったら危ないという感覚だったと思うんですね。だから見事に誰も手を挙げなかったんです。

でも私はニコニコしながらその笑顔を崩さずにその子に目線を多めに当て続けたんです。そうしたら少しその子がいろいろ考えている様子で、最後は観念したようにバツと手を挙げたんですね。一所懸命準備したり努力を重ねているところには、やはり神様は応援してくれるんです。その子がバツと手を挙げたので、私は大いに驚いて「ありがとう」と力強く言いました。その子が手を挙げたら、周りの取り巻きの子どもたちも手を挙げて一緒に手伝ってくれた。私はそのことをお母さんにすぐ電話をして伝えました。初日のうちに、一筆箋にも書いてお礼も伝え、次の日の学級通信にも書いたんです。そうしたらそのことがとてもうれしかったみたいで、その内容を卒業文集に書いていたんです。

このようにスピード感というのを私はすごく大切にしている、出力まで時間がかかるからまだいいやという感覚はないんです。正攻法できちんとした適切なステップさえ踏めば、特に荒れていたり難しくなっているケースほど、あっという間に大きな変化が訪れるということは、たくさんあるわけです。そのようにしていると、本当に「嘘でしょ

う」というぐらい鮮やかに、それこそ魔法以上に魔法のようなことが起こり得るんですね。こういう一つひとつの事実を積み重ねていくと、チームは大きく変わります。何か自分も変わるかもしれないという希望や願いをもてるようになるからです。

教育は情性が強くて検証のしようがないというのはまさにそうなのですが、一方で、教師の関わりによって明らかに変化が生まれることもあるんですね。検証すら必要ないぐらい、明らかにすることがあるわけです。

私はこういう事実のつくり方を、ずっと研ぎ続けてきた、磨き続けてきた、追い続けてきた。今もそうです。どうしたらいいだろうと、現代版の悩みや課題もたくさんあるので、私はある意味特効薬を探し続けているのかもしれないかもしれません。しかも、喜びとか感動をもって受け入れられる特効薬。体罰とか厳しい叱責とか、そういう特効ではなくて、喜びや感動をもって受け入れられる特効薬を探し続けています。それがチームを劇的に改善とか再生したりする起爆剤になったりします。